

書評01

キム・ヒョンデ、ハ・ジョンナン、チャ・ヒョンソク 著

『地域に根差してみんなの力で起業する 協同組合で実現する社会的連帯経済』

彩流社/2018年6月刊/220ページ/2000円+税
ISBN 978-4-7791-2463-1

評者：千 恵蘭 (チョン ヘラン)
佛教大学大学院社会福祉学研究科博士後期課程



2012年、韓国で出版され、多くの人々に協同組合を知る機会を提供してくれた本書が、日本語で訳され、出版されたことは、韓国人としてとても嬉しいことです。2018年6月に日本語版が出版されたのを契機にくらしと協同の研究所から書評の執筆を依頼され、一瞬躊躇しました。この本は、私には教科書のような、始めて協同組合に対する興味を持たせてくれた本なので、その書評を書くのは難しいと思ったからです。それで、書評というより、私の感想を分かち合いたいと思いました。

韓国版のタイトルを直訳すると『世界の99%のための企業を学ぶ—協同組合、とても素晴らしい』となるのでしょうか。私がこの本に出会ったのは、2015年の春でした。当時、私は修士論文を書いており、障害者に働く場を提供する事業体としての社会的企業・社会的協同組合の社会的役割について考えておりました。協同組合というと、金融業の農協や購買生協のイメージが強かった私は、社会的協同組合や連帯協同組合、労働者協同組合などについて書いてある本を探していたのですが、ほとんどが学術的な内容であったり、海外の書籍を直訳したものでした。その点、本書はいろんな国々の多様な分野における多様な事例がとてもわかりやすく、面白く紹介されていたので、すぐ読んでしまいました。「えっ、それが協同組合だったの?」と、この本を読みながら驚いた記憶があります。FCバルセロナ、サンキスト、AP通信、フォ

ンテラ、ゼスプリ、ウェルチ等々が全部協同組合企業だったんですね? 本書で紹介されている様々な事例を見ながら、協同組合の勉強を始めたばかりの私がワクワクしていたことを覚えています。

「ガンガン1人で進むのではなく、何人かと一緒に遠くまで進もうとする人たちの物語」これがこの本を一番よく表現しているのではないかと思います。自然に優しく、社会連帯を夢見る世界各国の多様な協同組合事例を、キム・ヒョンデ、ハ・ジョンナン、チャ・ヒョンソクの3人の言論人が直接取材し紹介しています。ともに韓国において協同組合を試みる様々な団体がいかに協同組合をつくり、運営していくのかに対する積極的な答えを提供しています。本書は、様々な取り組みの事例を取り上げながら、協同組合についてのたくさんのことを分かりやすく語るように説明しており、韓国で始めての大衆的な協同組合書籍とも評価されています。本書は大きく3章で構成されています。まず、第1章は世界の協同組合企業の話からスタートします。著者たちはイタリア、デンマーク、ニュージーランド、スイスとオランダなど、協同組合の先進事例を取材し、幸せな職場をつくっている様子や、そこで働いている人々との対話を生々しく、そして豊富に盛り込んでいます。第2章では、韓国の協同組合の聖地とも呼ばれる原州(ウォンジュ)地域の協同組合運動について言及し、多様な分野で多様な協同組合

をどうつくるかという視点で話を展開しています。第3章では、著者たちが重ねてきた国際機構(ICA、ILO)のリーダーや協同組合研究者との対話も収録されています。最後に協同組合基本法の内容と意味について説明をしている韓国語版とは違って、日本語版では、立教大学の藤井敦史先生により、韓国で本書が出版された背景や協同組合が作り出そうとしている社会的連帯経済に対する解説がなされています。

世界各国の事例を見ながら、驚いたのは、協同組合は意外と力強いということでした。たくさんの人から「共生」は難しいといわれたりもしますが、多くの取り組みで見ると、協同組合の人々は速くはないけど、基盤をしっかりと作りながら一步一步踏み出していることが分かります。そして、驚いたことのもう一つは、いろんな分野において協同組合の設立が可能であるということでした。教育、芸術、農業、畜産業、金融など…私たちが生活しているあらゆるところで協同組合が運営されています。このような海外の事例を見ながら感じたのは、協同組合が成長するためには、やはり「人」が大切だということです。また、協同組合の原則を守りながら信頼を失わず、その信頼に基づいて成長していくことも大事です。いくら協同組合関連の法律などが制定・整備されるとしても、政府のみならず、市民の持続的な関心と愛がなければ健全で健康的な協同組合をつくっていくことは難しいでしょう。

紹介されている多様な協同組合の取り組みから見えてくるのは、藤井先生が仰ったように、協同組合が作り出そうとしている経済は、基本的に、人々の生命や生活に密着した領域の経済であるということ、人間の生存を支える「共生の経済」、地域に根差し、自然環境とも調和した持続可能な経済であるということです。

今回改めて日本語版を読みながら、私の頭からずっと離れないことがありました。それは本書にも紹介されている江原道原州のたくさん

の協同組合とその組合員の方々の顔です。加えて言うと、原州は私にとっては格別な存在です。

私は地域福祉の新しい実践主体として社会的協同組合の役割や位置づけなどを研究しており、原州の取り組みを中心にフィールドワークを行っております。原州の協同組合運動においてずっと大事にされてきたのは、人々の生命、暮らし、そして自然との調和です。

2003年8つの団体が設立した「原州協同組合運動協議会」は、「原州協同社会経済ネットワーク」へと進化し、2013年5月、韓国では初めて「協同組合のための協同組合」として社会的協同組合の法人格を取得しました。「原州協同社会経済ネットワーク」は、同種だけではなく異種協同組合も参加できるという側面においては協同組合基本法上の連合会とは異なります。また、協同組合など社会的経済組織を支援する中間支援組織と似ていますが、当事者組織でもあるという点では異なる性格を持ちます。

2018年12月現在、「原州ネットワーク」には38の会員(団体35、個人3)が参加しており、組合員数は約3万5千人、雇用人数は約450人、資産約1千500億ウォン(約1億5千万円)の規模であります。原州地域の協同組合運動は海外においてはあまり知られていないですが、協同組合の聖地とも呼ばれるほど、韓国の協同組合運動の歴史においては欠かせない地域です。私としては原州の取り組みが日本に紹介されることになり、とても嬉しく思っています。

この出版を契機に、韓国のいろんな地域で行われている協同組合の取り組みが今後とも紹介され、日本と韓国の交流がさらに活発になり、お互いに学びあいながら大切な経験を分かち合っていくことを心から願っています。